

桜花 四

比島編



不快な羽音が耳を掠めるが、滴る汗すらも拭う余裕のない男には気が付かれもしない小さな命で、それが薄暗い部屋を縦横無尽に飛ぶ。

黒々と日焼けをした、腕白な少年がそのまま大人になったような男であった、それが恐らく子供の頃の学校以来であろう、机に倒れ込むようにして必死に事務をこなしている。その背は今にも紙の束を放り出して、滑走路に並ぶ愛機に飛び乗ってしまいそうな苛立ちを汗と共に滴らせている。彼はこの部隊の分隊士をしている杉本だ。

小一時間ほどずっと机にかじりついている彼は、時折恨めし気に顔を上げて、窓際で煙草をふかしている山崎を見る。後ろに流した長い髪は熱帯夜の湿気でも崩れることなく、彼を端正な海軍士官に仕上げていた。紙上を走る鉛筆の音が消えたのに気が付いた山崎は、湿った室内の空気にのんびりとした動作で煙草の煙の輪を浮かび上がらせると、柔和な笑みを浮かべて杉本に言ったものだった。

「うまくなっただろ、輪っか作り。純矢に見せると、目を丸くして煙が浮かんでいくのを目で追うんだ。かわいいよなあ」

小さな灯りの中で浮かび上がる煙草の煙は弱弱しげに揺れながら漂い、ヤシの葉で作った天井に消えていく。

その薄暗い部屋は水分をたっぷりと含み、書類はふやけていた。

耳元を忙しく飛ぶ蚊を手で振り払いながら、杉本は頭に巻いている鉢巻を締め直す。

「はあ、そりゃよかったですね、隊長。ところでこれのどこがだめですか」

杉本が頭を抱えているのは見認証と現認証だった。前者は戦果報告のため、後者は戦死者のために書く報告書であるが、上官である山崎の決裁がどうしても下りないのである。

ラバウルから内地に戻り、山崎らと別れた杉本は、教官をやり硫黄島に飛び――再び彼の部下となって、今は比島レイテ島にある海軍航空隊の基地にいる。途中、准士官に昇任したので、今や山崎のような分隊長を補佐する分隊士なのだった。

「次の分隊士は誰だろうかと名簿を見ていたら、お前の名前があってね。ぜひに、と言ってもらったんだよ。いやぁ驚いた。お前がねえ、分隊士ねえ」

「こんな事務仕事、向いてないんですよ、俺。俺は戦闘機乗りなんですからね」

話をはぐらかされたことに気がつかない杉本は、唇を尖らせた。

「しかもなんですか、あの士官教育とやらは。今時どこでディナーを食わせてもらえるっていうんですか。俺は腹が減って仕方なかったですよ。ああ、死ぬ前に一度でいいから横文字の飯を食ってみたいや」

杉本は椅子の背もたれに大きく寄りかかって伸びをした。椅子が悲鳴を上げるのを見ながら山崎は苦笑する。

「本当、お前がなあ。お前がねえ」

彼は、何かあるとこれしか言わないのである。それもそうであろう、開戦前からずっと見てきた暴れん坊の下士官が、海軍の英国流士官教育を受けたというのである。

兵学校から艦隊勤務を経、飛行学生となり、戦闘機乗りとなった山崎は、古き良き時代の粒よりの海軍士官だ。日本海軍で受けた英国流紳士教育が山崎には骨まで染み込んでおり、落ち着き払った上品な気配が当然のように漂っているのだが、野山で育ち海兵団から上がってきた叩き上げの杉本には、どうにもあの教育が馴染めなかった。どうして食事ですらあのよう緊張していなければならないのか、到底理解ができない。

「それはそうと、隊長。ここどこが……」

「まあまあ。そろそろ寝ないと明日に差し支えるぞ」

山崎は煙草の火を消して立ち上がった。

「ちょ、待ってくださいよ。今日の分だけでも見ていってください」

敵機に囲まれても動じない男が泣きそうな声を出して山崎に縋る。山崎は伸びをして再び椅子に座った。

この一戦に勝たざれば 祖国の行くて いかならん――

これほどまでに歌われた比島である。しかし今では、太平洋に散らばる島々を米軍によってほとんど奪われており、あの海もこの空も、どこもかしこも敵の手の内にあった。ラバウルを追われた彼らが一番そのことを知っている――比島は堀のない丸裸の城のようで、パラオ諸島、マリアナ諸島の部隊が玉砕してからは米軍の攻撃をよりまともに受けるようになっていたのであった。海軍は、ミッドウェーで自慢の連合艦隊を沈められ、陸軍はビルマ防衛強化のためのウ号作戦で十万人の兵士を投入して七万二千人を失い、ミートキーナー――中国が米英からの武器援助を受けるための大事な中間地点である――を敵に奪われてしまった。杉本がいた硫黄島はまだ日本軍守備隊がいるが、杉本ら戦闘機乗りは飛行機がなくなってしまう、最後の輸送機で搭乗員だけ内地に戻るようになったほどである。

そのような中で、杉本は必死に戦果報告書を書き、戦死証明のための書類を作成する。これがなくては日々死んでいく仲間らの手向けにならないのだ。

「俺がどう書くのか考えてくれればいいよ。今まで分隊長にそう言われたことはなかったか？」

「はあ、最近すぐに隊長が変わりますからねえ、山崎隊長が来てようやく落ち着いたところですよ」

杉本は首を捻ると、あとは黙ってするすると文字を書きだした。

「隊長には織田がついているから安心だ。いえね、別に他の奴らが弱いつているわけじゃないですが、こうも次々と分隊長がやられていっちまうとねえ。最近補充されてくる搭乗員は大卒や子供ばかりで、空戦を教え込もうにもすぐいなくなっちゃう。俺が教えた奴らも今頃元気にやっているのかどうか……。まあ、米軍機に囲まれたら、誰だって人のことなんか見えなくなりますかね。俺は経験で生かされているようなもんです」

山崎は再び煙草に火を付け、力なく暗い天井を見上げた。

杉本の言葉は実際部隊に影を落としている現実であった。勝ち戦だった頃に比べて、今や飛べば必ず死ぬ戦場だ。特に士官の消耗が激しい。そこで組織は早急な士官増員のために、大学出の

学生を短期で士官に仕立てたり、杉本のような下士官らを准士官に登用したりして、何とか頭数を揃えようとしているのだが、海軍の体質として、士官は結局のところ兵学校出が優遇されるのであった。その上、大学出――杉本に言わせれば、いい年になっても親から金を貰い勉強をしていたような男が急に士官となってやってくる、戦場も軍隊生活も知らない彼らが急に士官なのである。実力がついてこない、理屈で生きている彼らの存在は熟練下士官であればあるほど嫌う傾向があった――あげく二番機には実戦経験の少ない、子供のような新米搭乗員ばかり、整備員の消耗も著しく召集兵ばかりで整備の質も下がっている、更には材料の質も低下していて具合の悪い機体で溢れているのだった。整備だけの問題ではないのだ、飛行機も何もかも生産数が激しく減り、喜び勇んで新しい機体を工場に引きとりに行ったはいいが、不具合だらけで受領できないということなど常にあった。

戦況はおろか、部隊内の不穏な空気、そして彼らに溜まる屈折した鬱憤は異質なものに向けられるのが世の常である。

それがこの部隊では純矢であった。

彼を知る者は、分隊長の山崎と分隊士の杉本、そして彼らと呼ばせられた飛行隊長の総司だけである。居並ぶ歴戦の搭乗員について回り、腰には陸軍の軍刀を下げ、口調も仕草も陸軍仕込み、青味がかかった灰色の目――とこれだけ揃えば、憂さ晴らしの標的になるのも自然の流れであった。

その上この基地のすぐそばには陸軍が駐屯している。純矢が姿を見せないと、搭乗員らは忌々しそうに言うのだった。

「こっちだって余裕がないのに、奴はまた食糧を横流ししているんじゃないか」

「奴らが始めた戦争に、何で海軍がこんなに巻き込まれなきゃならんのだ」

当人が彼らとほぼ接触をせず相手にしていないこと、そして杉本がその面倒見の良さからうまく部隊を回していることが、ぎりぎりの綱渡りではち切れそうな緊張を、絶妙な調和で抑えているのである。

山崎は虚ろな仕草で、杉本の書きあげた書類を取った。

「戦死した搭乗員のものは、こう書くんだよ」

言って、そばにあった鉛筆で訂正を入れる。

「遺族が見るんだ。織田中佐もこれを元にして遺族に手紙を書いておられる。花向けなんだよ、これは。事実はいいんだ――」

杉本は俯いたまま、山崎が手を入れたものを受け取った。

「もっと飛行機があればなあ……」

彼の呻きは蚊の羽音にかき消されるはずであった。

ねっとりとした静寂をかき消したのは、神経質な怒声であった。

慌てて山崎が外に出ると、隊舎入口の月明かりの下で、二つの影が向き合っていた。声から察するに、一方的に喚き散らしているのは村瀬という大卒の中尉で、無言を貫き微動だにしない小さな黒い塊は純矢であろう。

「どうしました」

山崎はゆっくりとした動作で二人に近寄った。

「なんだ、純矢か。明日は俺と飛ぶんだぞ、早く寝なくちゃダメじゃないか」

純矢は返答もせず、気配すらも消しているが、刺すような視線は村瀬に向かい、今にも刀を抜きそうである。

「部下が何かしましたか」

山崎は、怒りで震えている村瀬を圧するようにして立った。

「どうしました、純矢が何かしましたか」